われら サークル仲間

囲碁教室

中央公民館には五教室十七サークルがあり、文化祭への参加などいろいろな活動が行われています。年齢、職業はさまざまですが、それぞれサークル仲間の和が広がって、毎回楽しく受講している皆さん。その触れ合いの場を紹介します。

今回は囲碁教室におじゃましました。

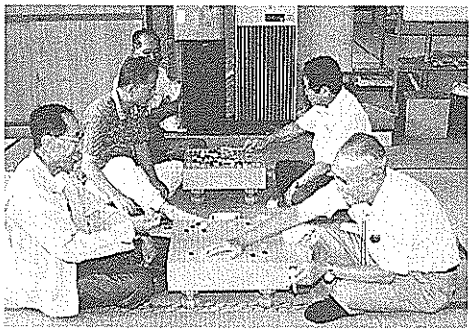
◇　◇

囲碁教室は今年六月に始まったばかり。教室生は少ないのですが、人柄のよいユーモアに富んだ講師河野保さんを中心に平均年齢六十五歳の七人のメンバーが毎回おしゃべりも賑やかに集まっています。

内容は実戦。河野さんが来るのは第一と第三の水曜日だけですが、そのときの河野さんとの対局では一つ一つ丁寧に分かりやすく指導、助言してくれます。その他の練習日は教室生同士で親交を深めています。

教室生は「相手の出方を考えると同時に、自分の打った石が相手にどういう影響を及ぼすか試行錯誤するのが楽しいです」と話してくれました。

最後に教室生の一人、西村裟久保さんから一言。「囲碁に興味のある方、男女を問わず大歓迎です。全く碁をしたことのない方でも構いません。参加してみませんか」



子育て広場

お手伝い
―できたという喜びを―

家庭教育学級専任講師　秦泉寺　千津

「ママお皿運んであげる。」「じゃあ、落とさないように気をつけて一枚ずつ運ぶのよ。」

三歳になったまなぶちゃんは、お母さんのお手伝いが大好きです。

「まあ、じょうずにできたわね。ありがとう。」

好奇心の盛んな幼児は、お母さんがやっているのを見ると、「わたしにもやらせて。」「ぼく、やってやるよ。」とすぐまねをしたり、手を出したりします。

そんな時、子どもにやらせるのか、「いいからあっちで遊んでいなさい。」と言うのかお母さんの接し方で、やる気の芽を伸ばすことができるのか、摘んでしまうのかに分かれてしまいます。

忙しい時のお手伝いは役に立ってありがたいものですが、幼児のお手伝いは役に立つどころかやり直しをしなければいけなかったり、迷惑になることさえあります。

それでもお手伝いは、子どもの人格形成にとってプラスになる要素がたくさんありますから、いろんな体験をさせてあげたいものです。

最近は便利な家庭用品が普及し、生活が合理化されて子どもの手を必要としなくなり、そのため昔に比べると、お手伝いは少なくなりました。

けれど、幼い子どもはお使いや食事の準備、後片付けなどお手伝いが大好きです。

お手伝いをしたいという要求は、「自分もあんなことができるようになりたい」というやる気、自立心の現れです。

お手伝いをしている時の幼児の表情は、物事に集中し、生き生きした顔をしています。やりたがることは、どんどんやらせてあげましょう。

内容によっては、とても無理とか危険に思うこともありますが、子どもは興味しんしんです。やらせてみれば案外できることもあって、少しずつ上達していくものです。

子どもが手伝ってくれた時は、「ありがとう。助かったわ。」と感謝の気持ちをあらわしてあげましょう。お母さんが喜んでくれた。家族の役に立ったという体験が自信となり、やる気が育ちます。

子どもも家族の一員として、成長に応じて家庭の仕事を分担し、子どもなりに責任を果たし、役立っているという喜び、充実感をもたせることが大切ではないでしょうか。

それぞれの家庭でお手伝いについて工夫してみましょう。